

三年ぶりに訪れた宝石の湖は何も変わっていなかった。きっと何百年も何千年も前からこのままの姿でここにあったのであろうその姿で、私の目の前に青い水をたたえていた。白い氷河から流れ落ちてくる水が何故こんなにも青いのだろう。

「五色海(ウースーハイ)は何処にあるんだい？」

学生の一人が私に尋ねた。湖の名前は知らなかったが、私は即座に崖の上にあったもう一つの湖を思い浮かべた。底に沈んだ石や深度で微妙なグラデーションを作り色を変える青い湖は、確かに五色海という名前がぴったりだ。

「この崖を登ったところにあるの」

私が答えると、元気な男子学生達は我先にと競争のように崖を登りだした。この辺りまでくると4000メートルを越える標高で酸素はだいぶ薄くなっている。身体が重く息が苦しい。私とウィンと一緒にゆっくりと崖を登った。崖の途中で並んで腰掛け休憩すると、眼下には青い乳奶海が丸ごと見える。

「とっても綺麗……。私、この旅行の事は絶対忘れないよ。あんな牛小屋に泊まった事も、こんなに綺麗な湖を見た事も。きっと元子がいなかったら来れなかった。ありがとう」

ウィンが言った。

たんなる行きがかり上、行動を共にする事になったウィンと私だったが、ほんの2日間とは思えないほど色々な出来事が凝縮された時間を過ごし、苦楽を共にしてきた私達の気持ちには国籍を超えた友情のようなものが芽生えていた。

崖を登りきると、まるで噴火口の様なすり鉢状の窪みの底に五色海がある。湖底に沈んだ石の一つ一つがそのまま透けて見える瑠璃色の美しい湖だ。窪みの縁に立って五色海を見下ろしていると、頭上から聞き覚えのある音が響いてきた。ゴトッ・ゴゴゴゴゴ・氷河に歓迎の言葉をかけられているような気がした。

一緒に登ってきた青年の一人が寄ってくると私に手を差し出した。

「本当に綺麗な場所だ。君がいなかったら俺達、この湖は見つけれなかったよ。ありがとう。」

彼の手を握り返しながら、私はくすぐったい気持ちだった。ウィンといいこの青年といい、ここは中国だっていうのに中国人の彼等に感謝されちゃうなんて、にわかガイド冥利につきるじゃないか。皆がこの場所に来られたことに満足しているらしいのが嬉しかった。

これで幻の湖とはお別れだった。しばらく窪みの縁から五色海を眺めると「さぁ行こうか」といった感じでこの場

を立ち去る青年達と共にゾロゾロと山を下った。前回、一人で賽の河原を彷徨っているような心細さを感じながら長い時間過ごしたこの場所も、大勢の仲間と観光に来るのとはずいぶん印象が違うものだ。初めて来た時が一人ぼっちで良かった……。だからこそ、この場所をしみじみと深く味わう事ができたのだ。この日この場にいたウィンや学生達がいくら綺麗な場所だと感じてはいても、おそらくあの時の私と同じような気持ちで此処が強く心に残る事はないのだろう。

心待ちしていたこの場所への再訪があまりにアッサリと終わってしまった事が何処か物足りなく心残りのまま、私は二つの湖に別れを告げて山を下った。

洛絨牛場の老女の小屋に戻った時には、そろそろ午後遅い時間になっていた。

既に老女や小屋の子供達とも馴染んでしまい、みんなで囲炉裏の周りに腰掛けお茶を飲んで休憩させてもらった。小さな赤ちゃんがダンボール箱の中に布団の様なものと一緒にぎゅうぎゅうに詰め込まれ、立ったまま眠っているのがとても可笑しくて可愛いらしい。カメラを持っていなかったのが残念だ。

ウィンと学生達はそのまま下山して自然保護区の入り口まで戻り、そこでタクシーを拾って稻城まで戻るとの事だった。たった2日間とは思えない濃い時間を一緒に過ごしてきたウィンともここで別れだ。雲南省を旅していた時に買ったという民芸調のプレスレットを「記念だよ」と私の手首にはめてくれ、私達は抱き合って別れを惜しんだ。

一人この場に残り洛絨牛場を立ち去る彼等を見送るとフゥ…と息が漏れた。いくら洛絨牛場に愛着があるとはいえ、これ以上一人で昨夜の物置小屋に泊まる気はなかったが、私はもう少しこの場をゆっくり味わいたかったのだ。

三年間ずっと心の中で温めてきた洛絨牛場は私にとって特別な土地になっていた。やっと願いがかない再びこの地に訪れる事が出来たというのに、昨日から今までがあまりにあわただしすぎたのだ。一人でゆっくりとこの場所を感じたかった。

夕暮れが近づき空気が冷えてきたためか、神の山ヤンマイヨン「央邁勇」が再びその姿を現していた。小屋の中では囲炉裏がトロトロと暖かそうな炎をあげ、急に静かになった小屋の周りでは幼い女の子が家事の手伝いをしたり家畜の世話をしたりと甲斐甲斐しく働いている。気温が急速に下がりはじめていたが、薄着のまま冷たい水に手をひたして働いている彼女に「寒くないの？」と尋ねると首を振り、「働き者だね」と声をかけると、少しはにかんだように笑顔を浮かべる。「央邁勇」を指差して「好き？」と尋ねると大

きく顔いた。まだ10歳だという少女の顔には凜とした美しさと民族の誇りが感じられた。

小屋にザックを預けたまま、日暮れ近くまで洛絨牛場を歩き回った。今後亜丁でどう過ごすかなどの予定は全く立てていなかったが、暫くこの地に滞在したかった。宿はくやしけれど沖古寺しかないだろう。昨日は啖呵を切って飛び出してきた沖古寺に今日再び泊まりに行くというのも何だが、流れでそうならざるを得ないのだから仕方ない。

小屋にザックを取りに行くと、無口な小屋の老女が小さく笑みを浮かべながら「また来年おいで」と声をかけてくれた。最初に出会った時は頑なに私達を拒絶していた老女の打解けてくれた言葉がなんだかとても嬉しかった。やっと亜丁が私を受け入れ始められたような気分だ。誰もいない道を央邁勇が見えなくなるまで何度も何度も振り返りながら洛絨牛場を後にした。

沖古寺にたどり着いたのはすっかり暗くなってからだ。入り口近くで昨日洛絨牛場で出会った管理人の腕章をつけた男が現れた。

「小姐、昨日は何処に泊まったんだい？」

どうやら私の事を覚えていたらしい。牛番小屋の老女に迷惑をかけたくなかった私は「森で寝た」と答えたが、「嘘は判ってるんだぞ」と言った顔で管理人はニヤニヤしていた。なんだか嫌な感じだったが管理人はそれ以上は追及せずに私の大きなザックを取ると先に立って歩き、沖古寺の宿屋の入り口で「お客を連れてきたぞ～」と呼びかけると、中から欲が顔に張り付いたような顔をした強欲そうな宿のオヤジが出てきて、やはり私を見るとニヤニヤした。

「泊まりたいの」

「60元だ」

あれ？学生達に尋ねた時には部屋代は40元だと言ってた筈だ。

「もっと安い部屋は!？」

「50元だ」

「もっと安い部屋!!」「大部屋だから良くない」

「いいの」

「50元の部屋がいいぞ」

「いいの!!私は安い部屋が好きだから」

「じゃあ40元だ」

親父と部屋代の事で押し問答していると奥から昨日の強欲そうな女将も出てきて私を一瞥して、やはり昨日の事を覚えているのだろう「そらごらんなさい」といった感じでフフンと笑った。まったく此処の宿の人間は虫が好かないが、朝からの登山と重い荷物を背負っての牛場からの下山でフラフラだった私は、意地を張る気力などとうに無くしてどうでも良かった。

案内されたのは七人部屋だった。全員が横一列に並んで眠る細長い小屋だ。畳一帖ほどが自分のスペースでちゃ

んと布団も置いてある。ゴミの散乱する物置小屋で寒さに震えながら眠った昨夜にくらべれば天国のように快適だ。小さなザック一つで遊びに来ていた中国人の先客達が私の大荷物を観て声を上げた。「あれまあ、あんたここに何しに来たの!？」

全く自分でも苦笑してしまう。私はいつだって自ら望んでしなくてもよい苦勞をしてしまうのだ。それでも私は満足していた。意地になって運んだ荷物は、私の望み通り洛絨牛場での昨夜のキャンプ(?)であますところなく利用したのだ。

部屋に荷物を置いてホッとすると、空腹を感じた私は再び食堂兼事務所になっている母屋に向かった。まったく何度見ても強欲そうな顔をしている宿のオヤジに食事がしたいと告げると揉み手をしそうな勢いで言った。

「小姐、何が食べたいんだ？」

「麺がいい」

「麺?麺なんか無いさ。おかずを2、3品取って白米を食べろよ」

「麺がいいの!!疲れてご飯なんて喉を通らないわ!」

亜丁にやってくる前に稲城で出会った上海小姐から、亜丁の食事は下界の何倍も高い事や麺料理がある事だって聞いていたのだ。

私が食い下がると、オヤジは台所に何事が叫んでどこかに行ってしまう、程無くして一杯の汁麺が運ばれてきた。何だよ、ちゃんと有るじゃないか。いちいち面倒くさい宿だ。宿の親父が顔に出ている通りに強欲なのが逆に可笑しくて笑ってしまう。

夜になると急激に気温が下がる亜丁の夜に麺の温かさが身体に沁みて、トマトと玉子の入った優しい味の麺は美味しかった。宿に着いた時間が遅かったせいもあり、私が麺を食べている間に食堂には誰もいなくなってしまった。何となくそのままにして席を立つのも気がひけたのでお椀を台所に運んでいくと、中では炊事係の若者が振り返って笑顔を見せた。。

「ご馳走様~!とっても美味しかった。うわあ、此処はあったかいねえ~!」

台所の中はカマドの火で暖かく、寒いのが苦手な私が思わず手をかざしているのを見た若者が「小姐、こっちへ座りなよ」と台所の裏口を指差した。覗いてみるとカマドの裏側の壁には薪がくべられるように穴が開けられ、その前にはベンチがあった。まるで暖炉の前に座っているように暖かく、背後には亜丁の森の静けさがたちこめている素敵な場所だ。暫くの間そこに座って、仕事を終えたらしい若者と他愛も無い話をして過ごしているうちに身体だけではなく心も温まってきた。

思えば亜丁にやって来て以来、初めて純粋な笑顔を見かけた。慌ただしかった亜丁の2日目の夜が更けていった。

慌ただしかった亜丁の2日目の夜が更けていった。

次号に続く